

名前：

本は

いくらインターネットが自由で便利でも、新聞や雑誌など本の存在は、私にとって不可欠で必要なものだと思っている。

本というものは人間の長い歴史の流れの中にずっとまえから存在していた。昔の竹の破^やから成る重くて書きがたい本や、今の紙に成る軽くて持ちやすい本も、みんな觸^ふられる存在感満ちた正真正銘の本というものだ。

手に觸^ふれる実在な物だから、年月を経て、その書物自身も歴史豊むものになった。その時になると、その書物の価値は^{たが}内容だけではなく、自身の来由や外見も歴史の一部となつて、又無い価値を得た。觸^ふれることと空間や時間を占有する存在は本は本としてのかけがえのない特別なところだと思っている。

それに対して、インターネットはいくら資料が豊んでも、存在感が極めて薄いものだ。どんな内容を変換しても、インターネットはやはりその冷たくて堅い四角い箱の中に存在しなければならぬ。いくら時間を経ても、

紙の色や文字の墨などに歴史の跡は一つも残さない。資料や本の内容は、ただ内容のままにそこにある。インターネットの資料はすでに死んでいた知識だ。

そのほかに、本というものは大きくしても小さくにしても作られる。電車を待つ時間や眠る前の少し間や食事の後の休憩時間など、いつでも、どこでも、簡単に読められる。電源やケーブルや電話代など、ささいいらない。インターネットよりやさしくて誰にも簡単に使用できる。しかも、一冊の本は^{四重}コンピューターより倍に軽くて壊しにくい。

だからこそ、私にとっていくらインターネットが自由で便利だっても、新聞や雑誌など本の価値は絶対的に存在^{している}。消えることは不可能だと思う。特に、毎日生活のために忙しい営んでいる現代の人々にとって、夜、眠る前に、巧みに製作された綺麗な一冊の本を取って、安らかな気持ちでその内容と文字を好きなだけに享受するのは、とれほど幸せな

ことだろう。

1800字